山と博物館

第40巻 第1号 1995年1月25日 大町山岳博物館

五竜岳直下をくだる登山者 写真と文 上田栄次郎

冬の遠見尾根

後立山は夏より冬に魅力があり、私の登山歴を見ても、夏は穂高に集中しているが、冬は圧倒的に後立山方面に足繁く通っている。

遠見尾根は、今でこそテレキャビンとリフトを乗りついで、いとも簡単に地蔵ノ頭まで運んでくれるが、スキー場として開発される以前は、山麓の神城スキー場、時には大糸線飯森駅から深い雪の中を歩かなければならなかった。

尾根の取り付きからの急斜面を、先行者のいないときは腰まである深雪のラッセルでしごかれ、登るにつれそれが胸までになり、一日の行動が地蔵ノ頭まで行ければ良しで、たいがいは遠見小屋の広い斜面に天幕を張ることになる。

冬山は荒れだすと、三、四日は行動がとれなくなり、社会人山岳会の我々は仕方なく、山頂を諦めて下山しなければならない。荒天の中での天幕の撤収も大変で、一気に片付けて下山に掛かるのだが、一時間くらいで麓の神城スキー場まで下れる天幕場から三十数人の他パーティと協力してラッセルの下山に六時間もかかった思い出もある。

名にしおう豪雪地帯の遠見尾根は本来の冬山の楽しみを失い、スキー場として開発目覚ましく、はなやいだゲレンデの隅を一列になって登っていく登山パーティを見ると、遠見尾根の下部は登山者の領域ではなくなった。

しかし中遠見から大遠見で見る鹿島槍北壁のモルゲンロートに染まる雪稜の素晴らしさ。特に荒れた翌朝の光の煌(きらめ)きは荘厳で一日の儀式が始まる光のドラマを見る思いである。

そこに冬山の真骨頂があり、冬山登山の素晴らしさが集約されているのではなかろうか。

ピンと張りつめた緊張感は冬山登山の独特なもので、苦しかったから、余計心にしみつく思い出として生きつづけているのだろう。

（日本山岳写真協会会員）

山岳博物館顧問
羽田健三先生を偲ぶ

阿部酉与

故　羽田健三先生

山岳博物館の建設（その出合い）

羽田健三先生との出合いは、私が中国大陸の戦地から復員して間もなく、昭和二十三年（一九四八年）だった。

大町山岳博物館建設運動が、公民館青年部や郷土部を中心に、当時の私たち青年が強い運動を展開できたのも、先生の持つ学術的基盤と、人間関係の強い信頼関係があったからだ。

先生は、『信濃大町の白鳥物語』の中に、「私は博物館建設運動に三人の同志を持っていた。一人は記者、一人は駅に勤める人、一人は青年団の幹部であった」と書いておられる。

私は建設時代に、羽田先生の同志として加えていただいたことを光栄に思っている。他の二人は古川潔さん（故人・当時毎日新聞大町支局長）と、内山慎三さん（現大町市観光協会長）を指している。

また、先生は『北アルプス博物誌』（大町山岳博物館編・㈳信濃路）にもこう書いておられる。

「私ほど山博に弱い者はいない。大町は八十四歳の母が健康でくらしている私の故郷である。山博の高台からの後立山連峰の景観は子供の頃から大好きで、いまでもできることなら毎日でも眺めていたいくらいだ。また私の大町高校勤務時代の多くの教え子はいるし、山博時代に協力を頂いて、いまだに親しくして下さる善意あふれる方々がたくさん居られる。また更に、山博の学芸員はみな私の教え子であり、私が山博に狂っていた頃、山博に入ってもらっているので、彼等の将来については私なりに大きな責任がある」

今、私の手元にあるメモを見ると、昭和二十六年（一九五一年）七月三日の大町議会が、山博建設の賛否を決めるヤマ場だった。私と羽田先生は傍聴にいったが、私が賛成意見が出ると拍手をし、反対議員に対しては野次るので、となりの羽田先生はびっくりしておられた。

当時は血の気の多い青年の衝動的行動だったが、おかげで議長だった伊藤半二さん（故人）に、ニラまれてしまった。しかしその後伊藤さんには、博物館協議会の委員長として、大町公園の現在地へ移築することについて、大きく尽力していただいた。

昭和三十八年（一九六三年）八月号の『世界』（岩波書店）に、私の入選論文が次のように掲載された。

「私は戦地で、〝人を殺す〟ことだけを、兵隊として教えられただけに、〝人を生かす〟道が知りたかった。そしてその青春が長い暗黒の時代であっただけに、明るい平和がほしかった。戦地で無意味に使い果たされたと思われた私のエネルギーは、この美しい郷土の再建運動に向けられた。私は青年団や公民館活動の中にとび込んでいった。アルプスの自然を保護し、探究するために、〝山岳博物館〟の建設運動や、公民館郷土部を通じて〝観光協会〟の設立に成功したのも、この頃―昭和二十四年であった」

自然と人間の融和を求めて

羽田先生の学究に対する基本的理念は、次の一文に明確に方向づけられている。

「私のこの十年間の仕事の原点は、一つは自然教育の拡大と充実である。すなわち私が生物の野外分野を専攻している教師であることもあり、野外の現場での自然教育を自然保護思潮を高めるための基盤として最重視しているのである。もう一つは、地方ごとに地域独特の文化と産業を一体的に振興して、あらゆる分野において中央と地方の格差を是正し、終局的には平和国家、文化国家を速やかに達成したいという念願である」（前述『北アルプス博物誌』昭和四十八年〈一九七三年〉三月）

この羽田先生の理念と熱意は、長野県当局を動かし、信大教育学部付属の「自然教育研究施設」を志賀高原に創設することに成功し、将来教師となる全学生に対し、自然を通じての人間教育の充実を図ることになった。この施設はわが国で初めての自然教育研究施設として、昭和四十一年（一九六六年）文部省の認可を得るに至った。

更に、先生の長野県における「天然公園」構想は、「県立自然園」として具体化した。奥裾花（鬼無里村）・茶臼山（下伊那）・蓼科御泉水（北佐久）・地獄谷（山ノ内町）・八千穂高原（南佐久）・栂池（小谷村）・乗鞍高原（安曇村）・破風高原五味池（須坂市）各自然園がそれである。

今、自然保護と開発理念の対立などでこう着状態になっている美ヶ原台上問題も、羽田先生が健在なら、別な視点から前進が図

博物館研究会の第１回八方登山の羽田（中央）
山崎林治先生（昭和29年）

鈴ケ岳ライチョウ調査の折
羽田先生と、故福島融調査員（左）（昭和36年）

山博ご視察の皇太子殿下（右）をご案内する
羽田先生（右から２人目）（昭和36年）

られたのではないか、と思う。

また、大町市においては、既に「東山低山帯野外博物館」が活動しており、槍ケ岳並びに針ノ木各自然園・仁科三湖自然探勝園などの構想が「羽田理念」を受けて持たれている。『大町市史・自然環境編』

長野営林局は、羽田先生の指導を受けて「自然休養林」制度を創設し、赤沢自然休養林・賤母学術参考林（木曽）・湯の丸・高峰自然休養林（小諸市）などを実現させている。

私も長野鉄道管理局の開発担当時代、黒姫・乗鞍高原スキー場開発を始め、国鉄と地域開発のあり方について、多くの教示をいただいた。

信大名誉教授・羽田健三・理学博士の優れた業績については、次の一文がこれを実証している。

「我が国の鳥類研究のパイオニア、故山階芳麿博士の研究業績を讃え、一九九二年に創設された山階芳麿賞の栄えある第一回受賞者に先生が選ばれたことも、このあたりの事情をよく反映している。

京都大学を中心とした生態学が〝京都学派〟と呼ばれたことがある。羽田先生は、我が国の鳥類生態学に〝信州学派〟を見事に打ち立てられたと言ってもいいだろう。（山岸哲・大阪市立大理学部教授・日本鳥類学会会長）」（平成六年十一月二十七日・信毎）

このように、羽田先生は自然の中の人間教育活動を通じて、文字どおり「自然と人間の融和」を探究した、偉大な自然科学者であると共に、実践的社会教育者だったと、私は思う。

人間「トリさ」の魅力

羽田先生の愛称は「トリさ」。その厳しい学者としての姿勢と、鳥類生態学の権威に対する畏敬の念と共に、一人の人間としての微笑ましいその庶民性が、こう呼ばせたのだろう。

教え子に対する教育方針の厳しさの半面、その将来に対しては教師としての責任から面倒を良く見た結果、教え子からは、博士、教授、そして各分野や地域社会で活躍するオピニオンリーダーが輩出している。

国や県の行政などに、学者としての立場から協力した反面、自然保護については、自己の信念に反する施策に対しては、強い批判と抵抗を示す人だった。

ライチョウやカモシカ研究のため、針ノ木岳や爺ガ岳を、教え子たちと片方のレンズしか無い双眼鏡を持って、飛び歩いていた「トリさ」。

鋭い理論を展開していたかと思うと、ふと「おちょぼ口」で笑う茶目気な「トリさ」。

その「トリさ」と私は、大町駅前でも、長野・権堂でも良く飲み歩いた。酒量はその行動力に比例して、きわめて強かった。酔うほどに歌う流行歌（今の演歌といわれる時代ではなかった）はお世辞にも、うまいとは言えなかった。

私も古希を過ぎて数年。その長い人生の中で、心から信じ合える数少ない知己の一人として、「人間・トリさ」の印象は、今でも心の奥に強く残っている。

私をして、いくつかの転勤の話を断わり、大町に二十八年間も留まることを決意させた精神的支柱は、「トリさ」のような人間が、そこに居たからである。

剛直なまでの、その強い信念を一貫して学術研究と人間教育に捧げ、全国を始め地域社会に、その知識と行動力を生かし、文化的、社会的遺産と共に、教え子を始め多くの人たちから追慕の念を残し、人間として敬愛する学者を、私はこの歳になるまでほかに知らない。

（元大町市教育委員・長野駅長）

・羽田健三先生は、平成六年十一月二十三日に逝去されました。享年七十三歳。

山博開館10周年記念式典で表彰を受ける羽田先生（昭和36年）

最近のタヌキ事情

千葉彬司

都会地では市街地にタヌキが出没したり、餌づけされたタヌキが、夜な夜な民家の庭に現われたり、それをマスコミが取り上げるなど最近は、人とタヌキの距離がより近くなりつつあるように思える。

市街地に出没する都会派タヌキは、その食物の多くを残飯に依存しているという報告があり、年間を通じての残飯の供給量がほぼ変わらないため、結果として繁殖力、個体群の増加の一因となっているようである。

また、各地に高速道路が建設されると共に、生息地を分断され、そこに現われた野生動物が車の犠牲になることが多い。

そのトップはタヌキで次いでノウサギ、ハトの順である。高速道で犠牲になったタヌキの数は、日本道路公団の調べによると一九八五年・二五八三頭、一九八七年・三九六六頭、一九八九年・五九一〇頭と道路が延びると共に犠牲になる数も増えている。

北アルプス山麓の大町は自然が豊かに残っていることもあり、タヌキはもちろんのことアナグマやノウサギ、テン、イタチ、さらにはカモシカ、クマなどの各種動物が生息している。

中でもタヌキとアナグマは農作物のトウモロコシやサツマイモを食害するため、昔から農家からは嫌われており、時にはしかけられたワナにかかりあえなく御用となってしまうものもいる。しかし、その数は知れたもので毎年トウモロコシなど取り入れ直前に食われてしまい悔しい思いをする人々がいる。

大町市内で保護され山岳博物館に収容されたタヌキは〔表1〕のようであるが、その多くが東山山麓であり、北アルプス山麓の方が少ない。生息環境から見て東山山麓の方が、タヌキにとっては住みやすいのかも知れない。

これらのタヌキ、特に東山山麓で保護されたものは市街地の東を流れる農具川より東側で保護されていたが、一九九三年にはその農具川を渡り市街地で死体（2）が発見されたり、目撃（4）されたのである。

今までにない現象であり、大町でもいよいよ都会派のタヌキが出没する事態になりつつあるのかも知れない。

ただ、都会派のタヌキは車以外に見えない恐ろしい敵がいることを知らねばならない。神奈川県では一九七五年ころ丹沢山麓周辺でイヌのジステンバーが流行し多くのタヌキが死亡したという。また、鎌倉市など各地でイヌの病気のフィラリア症にかかったタヌキの報告などがあり、一九九三年三月十五日に大町温泉郷で保護されたタヌキは皮膚病にかかっていた。

都会派タヌキは残飯という餌が安易に入手できる見返りとして、今度は恐ろしい目に見えない病気と対して生きていかなければならない。

（大町山岳博物館長）

表1　大町市内タヌキ保護

NO	性	保護場所	保護年月日	備考
1		平築場道路上	'62.9.10	○
2		平犬の窪	'63.8.5	●
3		平源汲	'63.8.31	●
4		平犬の窪	'63.9.1	幼●
5		社清音の滝	'63.10.5	幼○
6		常盤マネキ	'65.9.6	●
7		平第3発電所	'67.8.29	○
8		社清音の滝上部	'67.7.30	幼○
9		社清音の滝上部	'67.8.1	幼○
10		中山スキー場	'69.9.24	幼○
11		三日町	'79.8.12	○
12		三日町コテサシ	'79.8.30	○
13		三日町	'79.9.14	○
14		平稲尾	'80.8.12	○
15	♂	社木舟	'81.9.5	○
16	♀	山田町市民の森	'84.7.26	幼○
17	♂	山田町市民の森	'84.7.26	幼○
18	♀	平西海ノ口	'85.1.26	●
19	♂	山田町	'88.9.8	○
20		社松崎	'93.9.6	○
21		社舘の内	'93.9.21	○

○東山山麓側　　幼・・・幼獣
●北アルプス山麓側

参考文献
「街にタヌキがやってきた」
山口佳秀　山と博物館　37－3

山と博物館第40巻第1号
一九九五年一月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　大町山岳博物館　TEL(0261)○二二一
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三一九三